

旧約聖書の学びから公の礼拝には秩序が必要であり、形式の不可欠であることを認識している。しかしそのことは、旧約の礼拝形式が、今日そのまま拘束性をもつということを意味しないとする。福音の到来によって旧約的祭儀礼拝の規定は廃棄され新約の礼拝はそれらを自由に裁量し用いることができる。またこの自由の原則は、新約の礼拝慣行も相対化する。ルターにとって、聖書の唯一にして妥協のできない事柄は、キリストの贖いによる罪の赦しの福音のみである。教会制度、礼拝形式などは、福音にとって相対的なものであり、可変的なものであると考えた。このことに関連して端的なのは、ルターがその著『天来の預言者を論駁する』（一五二五年）で論じていることである。彼はそこにおいて、私たちはキリストのなされたことをすべて踏襲する必要はないし、またキリストがされなかったことをしてはならぬということはない、と言う。「それゆえ、私たちはいかなる手本でも認めるわけではないのである。……私たちに指し示すみ言葉が存せざる限り、キリストご自身のもので」である。キリストご自身の模範ですら拘束性をもたないとすれば、「他の聖徒」のそれは、なおのことである<sup>37</sup>。

自由の原則によって形成されていくべき礼拝の内実は、ルターにとってそれはみ言葉の礼拝、福音の告知としての説教にほかならない。しかし私たちはこの関連でひとつの事柄に留意しておきたい。それは「説教の礼典性」とも名づけるべき事柄である。説教は、端的に人間に対する神の恵みの出来事である。福音の説教を中心とする礼拝とは、主知主義的かつ倫理主義的危険をもつと批判されるいわゆる「説教中心の礼拝」とは質を異にする。前奏にはじまり、祈り、罪の告白、ゆるしの宣言、讚美から祝禱・後奏に至るまでの礼拝全体が、礼典としての説教を心に有機的に営まれるということである。説教が礼典的であるというのは、それにおいて神が会衆に恵みをもって臨みたもうという事実を言おうとする。イサクが与えた祝福に関連してルターは次のように言っている。神にある祝福は単なる言葉の響きでもなく、また人間が互いにかわし合う願望的挨拶でもない、それは将来にわたって決定

的かつ確実な祝福の授与なのだ、と<sup>38</sup>。彼のこの観点は、礼拝についても言いうる。礼拝は、その中心である説教において、恵みの神が現臨し働かれる場である。その意味で説教は礼典的なのである。この説教の礼典性から、彼の礼拝における聖餐式の重要性、また要素そのものにおけるキリストの臨在の妥協なき主張を理解することができる。ルターが、ローマ・カトリック教会——それは彼にとって長く「聖なる・公同の・唯一の教会」であったわけだが——の礼拝遺産の多くを継承した背後には、教会の公同性への信仰があることはすでに触れた。教会の公同性とは多様性を意味する。礼拝に関しては、多様な言語的衣装のもとにある礼拝の諸伝統は福音の豊かさを証言するものであった。ルターは、ヘブル語であれ、ギリシャ語であれ、ラテン語であれ、それぞれの言語の豊かさというものを知っていた。それゆえに彼は礼拝形成において排他的に自国語に固執するということにはなかった<sup>39</sup>。しかし、それは自国語の軽視を意味せず、かえって、彼のドイツ語への愛、それへの感覚の繊細さ、洞察の深さを裏づける。そのことは、彼がどのようにドイツ語による礼拝形成を考えたのかという関心呼び起こす。

『天来の預言者を論駁する』の中で、ルターはドイツ語によるミサをものにしたと願っており、現在その準備を進めているとした上で、そのドイツ語のミサは、ドイツ語の特質を生かしたものとしたいと、希望を述べている。もちろんラテン語のものをドイツ語にそのまま移すことも可能である、しかしそのようにして得られた礼拝式文は、不自然でほんとうの響きを出すことができない、と彼は続けている。テキストもメロディも、アクセントも言い回しも、また身振りも純粹に母国語から流れ出、その音の響きに呼応するものでなければならぬ、もしそうでなければドイツ語のミサと言っても、それは単なる「猿の行為同様のまねごと」にすぎないとしている<sup>40</sup>。彼の願ったのは、ドイツ語固有の美しさをもつ礼拝式の調達であり、しかもそれは排他的に唯一のものとして主張するのではなく、他の言語の礼拝と相並んで、全地の多様な言語的響きを用いて神を讚美し礼拝することへの参与であると考えた<sup>41</sup>。

### ③ ルターにおける犠牲——礼拝的実存の広がり

神と人間との人格的まじわりにおいて礼典的（サクラメンタルな）要素と祭儀的（サクリフィシアルな）要素は、車の両輪のようなものである。ルターの礼拝改革は、この二つの秩序の転換であり、神の恩恵の先行性を主張し、人間の神への関りを応答的なものにしたという点にある。それではルターの礼拝論における「犠牲」とはどのような内容をもっているのであろうか。

ルターの礼拝論における犠牲は、神にたいする感謝と讚美の範疇で考えられている。「与えること」を占有とする神に対して、人間は感謝と讚美のほか何も求められない。それらのみが、人間から期待される。「唯一の神奉仕である」と考えられている<sup>43</sup>。それはまた神の恩恵への信頼とご意志への服従というささげものである。このような意味での犠牲はルターの礼拝論において、どのように展開されているであろうか。まず上に述べた感謝と讚美の犠牲に加えて、祈りの犠牲、召命における奉仕の犠牲があげられる<sup>43</sup>。

福音に生きる信仰者の実存の基本は感謝と讚美である。「まことの礼拝は、引き返って来て、大声で、主をあがめること」であり、これこそが「天においてまた地において最大のわざであり実にわれわれが、神に与えることのできる唯一のものである」とあるとルターは、癒された十人の癩病人についての説教の中で述べている。それと言うのも、「神は愛とさんびのほか他のものは必要とされないし、われわれから何も受けたまわなからである」<sup>44</sup>。讚美は、彼が「マリヤの讃歌」（マグニフィカート）の講解の中でも言っているように、讚美するとはマグニフィケレであり、その字義は「大きくする」である。神を「偉大なる方」とすることは、神を神とすることであり、神礼拝の究極である<sup>45</sup>。さらにルターにおいては、神讚美は神信仰と表裏の関係にあり、しかも信仰とは自己を捨て自己に死に、神に生きることを意味する。

第二の祈りの犠牲も、神への信頼と自己否定の現れであるという点において、讚美の犠牲と共通するものをもっている。信頼という形において神を神とする行為が祈りである。しかもルターにおいては、祈りはキリスト論的規定のもとにある。神への祈願と信頼はキリストのあがないによって義とされたということが前提となっているからである。祈りは信頼の犠牲であり、信仰において祈ることは、神を支配しようとするのではなく、みずからの願いを申し上げつつも愛において顧みたまう神に信頼することである。彼は神の愛への信頼から、祈りの聞かれことを確信し、現実がその逆を行こうとも神を神とすることをためらわなかった。祈りの犠牲は、また愛の犠牲であることを意味する。聖徒のために祈り、隣人のために祈り、世界のために祈る。そこには信仰者と不信仰者、善人と悪人、敵と味方の区別はない、まさに「全世界の重荷をみまえにもっていく」愛の犠牲としての祈りがなされる<sup>46</sup>。

第三の召命における犠牲は、福音信仰から生まれてくる。キリストにおける神の恵みによって義とされた者は、もはや自己の存在を審判から守るための犠牲を必要としない。義とされた信仰者は、みずからを愛の犠牲として隣人にささげていく。召命——召命とはルター神学においては世俗における職業が神が派遣された奉仕の場所であると理解されている——におけるキリスト者のわざは、信仰のわざであり、「この世の王国」における礼拝である、とルターは考える。このような召命理解は礼拝の意味を広くとらえる方向に導く。福音的信仰者の実存は、定められた日のともなる礼拝——そこでは神との凝縮した形での交わりがなされるのであるが——を中心に、世俗の現実のなかに広がっていく。礼拝は、聖堂の中での「敬虔な礼拝に限定されないで、この世のニードに対する奉仕と自己投与のキリスト者の生活の全体を含んでいる」のであり、そのような「信仰と行動を含む、継続的また全体的な自己投与」こそ「からだを張ってするまことの礼拝である」と言われるゆえんである<sup>47</sup>。

#### 四、ルターの礼拝神学と「日本的」礼拝形成

私たちはルターの礼拝論の神学的前提とその展開を見た。この最後の章では、ルターの礼拝論が日本のプロテスタント教会の礼拝の現実にとどのような示唆を与えているかを考えてみたい。そして、きわめて断片的ながらも、日本の宗教経験における礼拝傾向の一端に触れ、それに対しルターの礼拝の神学がどのような接点をもちうるか、またそれが日本の文化の脈絡において新しい礼拝形成の契機となりうるかを考えてみたい。

##### ① 礼拝の礼典性の回復

日本のプロテスタント教会の礼拝の原型は、海外の宣教母体からもたらされた。自らの信仰的伝統の相対性を認識しうる宣教師たちは、神学や制度、音楽や建築などの分野と同様、礼拝についてもやがて日本に土着のものが生まれるであろうことを期待して、とりあえず自らの礼拝形式を用いたことは十分に想像される。しかし、当初にもたらされた原型は、歴史の流れの中で日本においても当該の教会の伝統となっていくことも確かである。高教会的な伝統に立つ教会、たとえば聖公会、またルーテル教会の一部などは、洗練された式文伝統をそのまま踏襲している。また「式文的禁欲主義」とでも言うべき単純質素な礼拝を営む教派の流れを汲む教会は、式文も音楽も教職者の式服も簡略で日常的である。だがこのような外面的な相違にもかかわらず、日本のプロテスタント教会の共通の特徴は、「『ことば』の礼拝」ということであろう。しかしそれを少し批判的に見るならば、いわゆる上でルターの礼拝論の核として論じたものとは異なる意味での「説教中心」ということである。つまり、「説教」が、奏楽や讚美、さんげや信仰告白や礼典、さらには献金や祝禱と有機的に結びつけられていないのではないかということである。「説教に間に合うように礼拝に行く」というのは、その卑近な現れであろう。

ところで、このいわゆる「説教」中心は、二つの問題を含んでいるように思われる。ひとつはそれぞれの礼拝伝統を無反省に踏襲して痛痒を感じないということであり、他は説教が結果として主知的なもの・倫理的なものにとどまっているということである。まず前者について言うならば、その移入された礼拝伝統が高教會的・低教會的を問わず、それぞれの教派の遺産として主体的に踏襲されるべきであり、また批判改革されるべきものである。無反省はその伝統を形式化し、礼拝の本質の根本的な反省を妨げるといふことになりかねない。また後者であるが、いわゆる主知的に捉えられた「説教」が礼拝の実質とされるべきとき、説教そのもののサクラメンタルな次元が失われ、福音的説教のもつとも基本的な要素であるつまりキリストとの生ける出会いを疎外し、説教そのものを「いいお話」に縮小しているのではないかと懸念される。

この観察が正しいとして、その背後にはプロテスタント信仰が日本に入ってきたときの事情が大きく作用しているであろう。初期プロテスタントの信仰は、ピューリタンの敬虔主義的であった。両者の意義を認めつつも、前者は倫理的側面を後者は信仰の主観的側面を強調するものであり、ともに神の側の恩恵の賦与、つまり礼典的要素を看過する流れにある。その端的な現れが、プロテスタント教会の礼拝における聖餐の意味の稀薄さであろう。降誕祭、復活祭などの祝祭日にしか祝われない教会も少なくない。

ルターの礼拝の神学において、「みことばとサクラメント」が車の両輪の関係にある。ルターは口ずからの説教を重視した。そこにキリストに立てられた説教者があり、そこにキリストが臨在される、つまり説教がサクラメンタルな性格をもつものとして理解されていたのである。それと同時に、ツウィングリとの一五二八年の聖餐論争において、彼が聖餐のパンとブドウ酒においてキリストがその体と血とにおいて臨在されることをかたくなまでに主

張したのも、礼拝の本質が単なる宗教的・倫理的奨励でもなく、また人間の主体的応答的意識を超えて働く神の超自然的作用でもなく、かえって受肉され、十字架につき復活されたキリストの臨在であり、その恩恵を頂くことに他ならないとする理解があったからである。その意味で、ルターの礼拝論は、私たちプロテスタント教会の礼拝にサクラメンタルな次元の回復を示唆しているように思われる。

ルターの「ドイツ語によるミサ」は、私たちが日本の礼拝の形成を考える上で重要な示唆を与えているように思われる。彼が、カトリック礼拝の有用な遺産は継承しつつも、ドイツ語という言語が代表する固有の文化に密着した礼拝を彼は試みたことについては上に見たとおりである。彼においては、伝統とその刷新が礼拝における福音の現実化という主題のもとで一つとなつていたのである。このようなルターの観点から、公同の教会のさまざまな礼拝的遺産を生かしながら、日本の文化・日本的感性の脈絡の中でどう新しく礼拝を形成するかという礼拝論的な課題が、日本の教会に与えられていることを指摘することができるであろう。

## ② 日本の宗教感情とルター的の礼拝論

教会史的遺産を継承しながら、礼拝の脈絡化を考えようとするとき、反省されねばならないのは日本の宗教環境における礼拝はどのような傾向かということであろう。むしろそれなりの客観性をもってそれについて述べることは、筆者の力に余るし当面の課題でもない。ただ、ひとつ日本の宗教的土壌において指摘されてきた問題を取り上げて論じることは許されるであろう。その問題の一つは、神と人との間に厳格な区別がなされないということである<sup>10</sup>。神は人のようであるし、人は容易に神となる。むしろその場合の神は、聖書的な意味での神ではありえない。聖書の超越神は日本の宗教伝統には、まったくの新しい神概念である。そしてこの神概念の独自性を強調することが、日本宣教において重要な意味をもったことは、日本宣教史初期における「神」の語の選定の苦心からも察知する。

しかし、これまで厳格に拒絶されてきた神と人間の関係におけるもうひとつの面、つまり神と人との連続性を、キリストの受肉と、聖餐における受肉のキリストの臨在に見ることはできないかということである。神が降って人となるといふ秘義は、人が上つて神となるといふ日本の宗教概念を根本的に否定しつつも、神が人となつてくださったという事実には、神と人との連続性を肯定している面があるのではなからうか。聖餐の礼典におけるキリストの臨在のルター的強調は、「まことの神にしてまことの神」というキリスト論的真理の告白でもある。日本プロテスタントの福音主義陣営において、ともすれば受肉の事実、つまりキリストは「今も」まことの人であるという事実を、見落としているかも知れない。もしそうであるなら、それはキリスト論的誤謬となるであろう。ともあれ、受肉のキリストがみ言葉とサクラメントを通し礼拝するむれの中に臨在され、そこにまた父なる神が臨在されるという信仰は、神を近くに感じるといふ日本の神経験となんらかの接点を見出しうるのではないか。ルターが福音に見た神はへりくだりの神でもある。その神の謙遜の契機は、日本の神経験と福音的礼拝論に接点を提供する可能性を秘めているのではなからうか。

日本の宗教感情が、形式的にもせよ神と人との連続性を前提とするならば、いわば逆対応的に神が人となられたという奇跡によって、神の側から人との「連続性」がもたらされたという観点からルター的の礼拝論から導きだすことができよう。これに関連して、さらにもうひとつの興味深い展開を期待しよう。すなわち、人がキリストのようになる、またひいては神のようになる、という展開である。日本の宗教感情においては人が神となるということは、さほど奇妙には考えられない。天皇が現人神とされ、政治的・道徳的・学問的その他においてすぐれた人物が神と

されるといふ宗教的上壌において、人が神に（もしくは神のごとくに）なるといふ宗教的観点はきわめて身近である。「人が神のごとくになる」ということであるが、それは罪と墮落という形で人間の存在に現出したが、「神の像」というもうひとつの概念を考えていくとき、それは必ずしも聖書的人間論にとつて、さらには救済論にとつて異質のことではない<sup>90</sup>。「神の像」あるいは「キリストの像」ということは、現実態としては神のごとくになりキリストのごとくになるといふことを含んでいると論議しうる。実際、ギリシア正教において「神化」（テオーシス）は、救済と同義であり、救済の内容を表現した概念である。ルターの神学においても、「神化」のテーマが底流としてあることは、最近のスカンジナビアにおけるルター研究で注目されている<sup>91</sup>。キリストとひとつになり、キリストの所有をみずからのものであるとして受ける、その結果キリストのごとくになるといふ思想はルターの神学においても一貫している。ルターの礼拝は、まさにこのような人がキリストのごとくに化せられ、神のごとくに化せられるという、そのような場なのである。神の祝福を受け神の愛に生きるものとされ、神の完全と神の麗しさにあずかるという意味での「神化」は、神の創造に発する人間の基本的な定めであり、それに根ざす人間の基本的な希求であるとも言えよう。そしてもしその基本的な希求が、日本的宗教感情においても現れているとするならば、義認信仰の現実化の場でもある礼拝は、人の「神化」が恩恵によって現実化する場として考えることができよう<sup>92</sup>。

神人の境界の融通無碍な日本的宗教感情は、その内実において否定されねばならない。だがそこにおける形式的な前提、神が近い存在であり、人が神のごとくになりうるといふ思想は、宣教論的接点としてとらえうるし、礼拝そのものも、日本的宗教感情が基本的にもつ希求が神の恩恵によって成就するといふ観点から形成されるならば、福音の現実化に奉仕する道が開かれる可能性があるであろう。むろん、そこにはシンクレティズムの危険は伴う。しかしルターの礼拝論を考えていくとき、危険をさけつつ日本にアクチュアルな礼拝形成の可能性があるのでない

いかと考へさせられるものである。

サクラメンタルな側面を強調するルターの礼拝論において、礼拝は狭義の礼拝と日常生活における広義の礼拝が同心円的に重なる。そして狭義の礼拝における神の恩恵の経験が日常における隣人愛という神礼拝へと展開していく。神はキリストにあつて恩恵を与えて人を信仰のみによって義とする神であるがゆえに、礼拝もその恩恵を感謝と賛美のうちに受ける神と人のまじわりの場となり、またその感謝と賛美が愛となつて流れる泉となる。インマヌエルの神、人間をご自身のごとくにしたもう神でもある。ルターの礼拝論は、救済における神の恩恵の絶対的強調のゆえに、この世界に「小キリスト」として、自己を忘れての愛の奉仕へと押しだす礼拝的実存を指示しているように思われる。

#### 注

(1) ローマ二・一、一ペテロ二・五

(2) いわゆる「リマ文書」において、洗礼（バプテスマ）と聖餐を重点的に扱っているが、礼拝におけるそれらの中心性を認識している点は妥当である。この二つの礼典に示唆されるさまざまな信仰的実存が礼拝において凝縮されていると考えることも妥当である。洗礼および聖餐の意味については、『洗礼・聖餐・職務』（日本基督教団出版局、一九八五年）の意味については、二八頁および四九頁参照。

(3) 「近世のリタージカル・ムーブメントは」中世の教会が会衆から遊離したこと、近代の礼拝が個人主義的傾向により無力化したことによる反動と見ることができよう」（森讓「リタージカル・ムーブメント」、『キリスト教大事典』、教文館、一九七五年）。

(4) 日本宗教史においても、信仰の教義的内容の伝達方法としての説教は決して稀薄ではないが、神道にしても仏教にしてもそれらの儀式的側面が前面に出ていると見ても間違ではないであろう。それに比較して、プロテスタント教会は人生論的・倫理的内容を主旨

とする説教が優勢であったことを認めうるであろう。「説教が礼拝において果たすべき使命は、説教者の思想を展開したり道徳的教訓を与えることではない」(加藤常昭)と反語的に言われる所以である。

- (5) 礼拝刷新運動は必ずしも説教を軽視するものではないが、礼典の、とくに聖餐の知的な面を越えた神秘性を強調する反動として、そのような場合も理解に困難ではない。一九世紀の聖公会における礼拝刷新運動において説教が軽視された例がある (cf. R. H. Fuller, "Sermon," Ed. J. G. Davies: *The New Westminster Dictionary of Liturgy and Worship Philadelphia: The Westminster Press, 1986*)。

- (6) 日本というならば、日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団などは高教会的な礼拝形成を、近畿福音ルーテル教会、西日本ルーテル教会はどちらかと言えば低教会的な礼拝形成をしていると言えよう。

- (7) 今回のルターの礼拝形成についての小論においては以下の二書物に多くを負っている。一つは、V・ヴァイタ『ルターの礼拝の神学』(岸千年訳、聖文舎、一九六九年)、もう一つは Jaroslav Pelican, *Obedient Rebels-Catholic Substance and Protestant Principle in Luther's Reformation* (New York: Harper and Row, 1964) "page"。以下の引用は「page」前者を「ヴァイタ」、後者を「ペリカン」と略記する。

- (8) 「しかし私は、(いま公にしようとして)いるドイツ語ミサとは別に(すでに)良い礼拝順序をもっているか、あるいは神の恩恵によってさらに良いものをつくりうる者が、私たちの(ドイツ語ミサの)順序を取り上げて従うことを希望しない」(青山四郎訳、「ドイツミサと礼拝の順序」、『ルター著作集第一集』第六巻、聖文舎・一九六三年、四二〇頁——以下、ことわりのない限り、ルターからの引用は『ルター著作集・第一集』からであり、『著作集』と略記する)。

- (9) 同四二八頁。

- (10) この、説教が中心であるというのは、いわゆる今日でいう「ケリユクマ」が中心であるということである。ここでの説教は、後述するように福音の説教が神の働きかけとしてサクラメンタルな意味と力をもっているという(こと)である。

- (11) 「神は、自由に純粹なあわれみから、また功績をぬきにして、値なき者、資格なき者……に与え、これ聖餐の恵みの制定)をみなしたもう。神は、このような方として、記憶され、告白され、あがめられようとなされた」(『キリストのからだ』と血の礼典についてのすすめ、一五三〇年、ここでは、「ヴァイタ」四九頁より引用)。

- (12) たとえば『教会のバビロン捕囚』(一五二〇年)から「聖なる礼典についての短い告白」(一五四四年)に至るまでである。

- (13) 『著作集』第三巻、二二七頁。

- (14) 新約の聖餐の祝いが、教会の制度的発展にそって次第に(否定的な意味においては)儀式化していくのであるが、本来の「感謝のささげもの」が「宥めの犠牲」に変わっていったのは、かなり早き時期にさかのぼるのであり、テルトリアヌスが二〇〇年頃、神の怒りを宥めるための犠牲の儀式について語っている。ヒッポリュトス、キプリアヌスを経て、教皇大グレゴリウスの時に、聖餐の儀式は、ゴルゴタ上において献げられたキリストの犠牲の、無血のしかも同一の犠牲の回復であるとの教理が成立し、彼自身、ミサの犠牲は神に働きかけて恵み深くあるよう働きかける手段であり、その犠牲はそれによって恩恵を被る人間がその場に居合わせなくても献げることができることとされた。またミサが煉獄にいる魂のためにもなされることと考えが半ば教理化したのもこの時代である。

- (15) 『著作集』第三巻、一三三〇頁。

- (16) 同三三二頁。

- (17) 同二四九頁。

- (18) 同二四四頁。

- (19) 同三二二頁。

- (20) 「ミサには神の約束と人間の信仰との二つものよりほかにはなく、後者は前者が約束するものを受けるからである」(同二四五頁)。カールシュタットに関しては、倉松功著『ルター、ミュンツァー、カールシュタット』(聖文舎、一九七三年)、一三二頁以下を参照した。以下、この書よりの引用は、「倉松」と略記する。

- (21) 「倉松」一五五頁より引用。

- (22) 「キリストの模範に注意する」(「倉松」一五九頁より引用)。

- (23) 「倉松」一四九頁以下参照。

- (24) 「ただ聖像を外的に禁止しても、人間の心がそれから解放されていなければ、聖像をなくすることはできない。一方外的な事柄は信仰を害わず、心はそれに左右されないゆえに、……かえってこの善でも悪でもないもの(聖像)を正しく用いる人間とすべからう」(「倉松」一四八頁)。

- (25) ルターは卓上語録において、民衆が町の見せものに引かれて市場の方に行くのは何か目新しいものを見たいと思うからで、もし教会

がそれゆえに空になるならそれに負けぬほどの(儀式的)見せものをして人々を教会に導くようにすべきだと言っている。むしろその場合、カトリック的「迷信」が入らぬようにと注意しているが(「ペリカン」八五頁より引用)。

「倉松」一四八頁。

27 もっとも単純な礼拝こそ、族長たちによって守られていた真の礼拝であった、とするルターの『創世記講解』における観点をペリカンは紹介している(「ペリカン」九三頁)。

「ヴァイタ」二五八頁以下。

29 「ペリカン」七八頁以下。

30 『著作集』第六巻、四二二頁(「すなわち、私は礼拝からラテン語を完全になくそうとは決して思わないからである」)。

31 同上。

32 ルターが「暴力や権威によって」は、「古いものを新しいものに変え」ようとしなかったのは、「古くてよく知っている神礼拝の様式を突如として取り去る」ことのできない信仰の弱い人」に対する「躊躇と心配」からであった(青山四郎訳『会衆の礼拝について、及びミサと聖餐の原則』、『著作集』第五巻、二八一頁)。

33 「ペリカン」八四頁。

34 同八六頁以下、および一〇〇頁以下。

35 ルターは、教会の礼拝の伝統を重んじ、その純化を意図している。たしかに彼の時代の教会の礼拝には「名称以外」に真実の礼拝も聖餐も伝わっていないほどであるがそれでも「古代の純粹」さを持った多くの讃詠などが教会の礼拝の中にあることを認めている(『著作集』第五巻、二八二頁以下)。

36 岩本岩根訳、『著作集』第六巻、一三二頁。

37 ルターは、創世記二七章二八―二九節の講解においてイサクの祝福について語っているが、その関連で彼は「しかしながら聖書においては、(単なる言葉としての祝福ではなく)真の祝福がある。それは事態をそのまま言及し、実効的である(indicativae et constitutivae)。それは、その言葉のほうに力を与え、実現する」と述べている。このことは礼拝において語られる説教における最も重要な(Peter Brunner, *Worship in the Name of Jesus*, tr. by M. H. Bertram, St. Louis: Concordia Publishing House, 1968, 三二六頁より引用)。

38 『著作集』第六巻、四二二頁。

39 『著作集』第六巻、一四五頁。

40 「ペリカン」八九頁。

41 「ヴァイタ」一三二頁。

42 同三〇頁以下。

43 同三二頁。

44 同三三頁。

45 同三三頁以下。

46 同三三頁以下。

47 同二四四頁以下。

48 神田健次他篇『総説・実践神学II』(日本基督教団出版局一九九三年)、三二頁。

49 神と人の間の厳密な区別がなされないということは、日本的宗教感情に限ったことではない。聖書的唯神信仰の埒外では一般的であると言えよう(そこには人間の創造における規定の歪曲が考えられるかも知れない)。しかし日本の宣教状況を考えるとき、無視できぬ宗教的土壌を現出している。その端的なあらわれが神社神道であろう。戸田義雄は、「神社神道は、日本語で言う『神』と人との融一を中核とする生活運動である」と結論づけている。戸田の説明によれば、神(「天照大御神」に象徴される)は天皇に治めらるべき道を示す(言葉や寄依せるといふ意味で「言依さし」と言われる)、そして天皇はそれを聞いて祭祀等を実行する(「みこともち」と言われる)。しかし、天皇が、そして神官が、「臣民」なり氏子なりに、「言依さし」の関係にたつときは、「神」となる。このように見ていくと「言依さし」と「みこともち」の関係は、存在の関係ではなく、機能の関係であるように見える。しかし戸田の観点は、存在にまで及んでいようである。つまり人はまた神でもあるという観点である。人は日本語で言う「神」となるというところに「人間問題の究極の解決を求め、それを日常生活の理想とした」ところに神社神道の本質があると言われる。戸田の言うこの神人融一が、日本人の「生活活動」であり「日常生活の理想」であるとされるところに注目したい。また戸田が例として引いている乃木將軍殉死の自刃を奉じる明治の新聞「萬朝報」の記者の言葉も一考に値する。つまり「今日まではすぐれし人と思ひしに、人と生まれし神にぞありける」と(戸田義雄「神社神道」、『現代宗教思想のエッセンス』、ペリカン社、一九八一年、一三―四一頁)。

50) 「彼(キリスト)は(天より)くだり、人々の間に住み、苦しみを受けられ、十字架につけられ死なれた」のは、「われわれが天に昇って、神の尊厳を思弁することを妨げる」つまり神の如くなるということ(ことを)を妨げるためであった、とルターは論じている(徳善義和訳「ガラテヤ大講解・上」、ルター著作集・第二集、四八頁)。

51) 上述においてカールシュタットの立場の「キリストのごとくになる」を、律法主義として退けた。筆者がルター神学から導きだすことが出来る「キリストのごとくになる」との違いは、カールシュタットの場合は義認を前段階としてそれが目的と考えられているのに対し、ルターのそれは義認の結果として考えられている。ルターの場合は、義認がすでに究極的救いとして理解されている。

52) このテーマにつき、日本ルーテル神学大学・徳善義和教授より以下の文献を紹介していただいた。このテーマについては、筆者の今後の学びの課題として願っている。

Simo Peura, "Der Vergeotlichungsgedanke in Luthers Theologie 1518-1519," *Thesaurus Lutheri* (Helsinki, 1987), 171-184

Simo Peura & Antti Rannio, eds. *Luther und Theosis* (Helsinki: Luther-Agricola-Gesellschaft, 1990)

また神戸ルーテル神学校・神学誌第一五号所収のK・アルスホーク氏の「最近のスカンジナビアのルター研究」もこのテーマに触れている。

53) 義認による「神化」について敷衍しておきたい。聖書の信仰においては、自然的な神と人との連続性は根本的に否定されるが、「インマヌエル」において神が人に近くなりますという事態そのものは肯定されている。同様に「人が神のごとくになる」ということも人間の側の業績の結果によってではなく、恩恵によって義とされたものはキリストの神性を恩恵としていただくに至るということである。しかも、それはおのれを高く価値あるものとするのではなく、謙卑の僕の状態においてその本質をあらわされた神のようになるということである。つまり、神に生かされ・己に死に、みずからを空しく与え仕えていくという意味においてキリストの性に、ついに神の性にあずかるという意味においてである。これは、救済の完成を意味すると言えよう。

#### 文献表

『洗礼・聖餐・職務』(日本基督教団出版局、一九八五年)

『ルター著作集・第一集』、聖文舎、第三巻・一九六九年、第五巻・一九六七年、第六巻・一九六三年

『ルター著作集・第二集』、聖文舎、第一巻・一九八五年

V・ウ・アイタ著『ルターの礼拝の神学』、岸千年訳、聖文舎、一九六九年

倉松 功著『ルター、シユンツァー、カールシュタット』、聖文舎、一九七三年

B・ケリッシュ著『恩寵と理性』、倉松功他訳、聖文舎、一九七四年

北村 宗次編『実践神学総説II』、日本基督教団出版局一九九三年、三二頁

戸田 義雄『神社神道』、『現代宗教思想のエッセンス』、ペリかん社、一九八一年

Jaroslav Pelican, *Obedient Rebels-Catholic Substance and Protestant*

*Principle in Luther's Reformation*, New York:Harper and Row, 1964.

Peter Brunner, *Worship in the Name of Jesus*, tr. by M. H. Bertram, St.Louis

Concordia Publishing House, 1968

R.H.Fuller, "Sermon," Ed. J.G. Davies, *The New Westminster Dictionary*

*of Liturgy and Worship*, Philadelphia: The Westminster Press, 1986.

(神戸ルーテル神学校・校長)